

待降節第3主日 B年

第一朗読 イザヤ 61・1-2a、10-11
第二朗読 一テサロニケ 5・16-24
福音朗読 ヨハネ 1・6-8、19-28

2023.12.17 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第二朗読では、使徒パウロのテサロニケの教会への手紙が朗読されました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」、わたしたちが聖歌を通して親しんでいる、その個所が朗読されました。でも、ここで注意しなければいけないのは、「いつも喜んでいなさい」あるいは「どんなことにも感謝しなさい」、そのわたしたちの喜びとか感謝っていうのが、自分が望んでいることが起るから嬉しい、自分が望んでいることが起るから感謝できるというような、そういうものではない。「どんな時にも」だということです。

考えてみると、このテサロニケの教会、パウロが手紙を出しているその先の教会は、その当時迫害されていました。パウロ自身もテサロニケには長く留まることができなくて、危険だからすぐに脱出しなければならない。でもその場所に残った少数の人たちを通してテサロニケの信者たちの集まりがスタートして、だんだんに成長していつている。そういう共同体に向けてパウロが手紙を出しているのが、今日の第二朗読の手紙ということになります。迫害されている、その困難な中であっても、しかし、喜びなさい、そして感謝しなさい。それは、その中心にある絶えず祈るということを通して可能になるということです。そのような状況の中でも、自分たちが神様と繋がっている、そこに希望がある。その希望を喜び、感謝するっていうことです。

昔の歌謡曲の歌詞ですけど、「こんなに乾いた時代にも天使は微笑むの」(山下久美子「Drive Me Crazy」)っていう、そういうような歌詞がある歌がありましたけど、何十年か経ちまして、その歌が流行っていた時よりも今の時代の方がもっと寂しいかもしれませぬ。人と人、あるいは違う考え方の者同士の断絶が深まっている。でもやっぱり、そんな時代でも、そのようは状況でも、天使だけではない、神様はわたしたちに向けて微笑んでいらっしゃる。そして、それを伝えるためにイエス様がお生まれになった。そのイエス様をお迎えしましょう、と呼び掛けているのが今日の福音での洗礼者ヨハネの呼び掛けということになります。

自分が望んでいる楽しいことや嬉しいことが起って喜ぶ——例えば、ディズニーランドが好きな人はディズニーランドに行くことができれば嬉しい。でもその喜びを保つには、毎日行かなければいけないことになります。でも毎日行ってるうちにだんだん人間は飽きてくる。そういうような周りの状況に依存した形での喜びっていうことは、過ぎ去って行くんです。

そうではなく、過ぎ去らない、自分の中にある喜び、自分の中から湧いて来る喜びは、神様を通して繋がっている自分自身の存在が神様の前に喜ばれている、そしてどんな状況でも恵みを見出すことができる。そういう信仰の目を通して初めて可能になるのではないかと思います。どんな状況においても微笑みを忘れない。それこそが信じる者の目指すべき、人間としての在り方と言っていいのではないかと思います。

そのために、わたしたちはミサの度ごとに、また絶えず神様との対話を通して、一人ひとりの中に、そんなにすべてが思い通りにならないけれども、その時にでも出来ることがあるし、そして恵みを見出すことができるという確信を得ていく、そこに招かれているのではないかなあと 생각합니다。

今日は待降節の第3主日ということで、喜びの主日というふうになっています。ですから、典礼の今日の祭服は待降節の紫色ではなくて、このピンク色になっています。それは、神様の救いが完全には実現していない、しかし神様の恵みは今も、この瞬間にも与えられているという、そこに注目して喜ぶという、それを呼び掛けるための主日だし、そのためのピンク色というようなことになるのではないかと思います。

わたしたちが、このミサという典礼を通して表現している、どんな時にも、わたしたちは神様の救いが完全に実現することを待ち望みながらも、しかしその瞬間にも救いと繋がっていて恵みを見出すことができる、その信仰の確信を新たにしたいと思います。どんな状況でも微笑みを忘れない、そういう生き方を一人ひとりの中に実現していくように神様の助けを願いたいです。

ところで、話は変わりますけれども、昨日東京教区には補佐司教様が誕生いたしました。補佐司教様はアンドレア・レンボ司教様というイタリア人です。ミラノ宣教会の宣教師の神父様が今度東京の補佐司教になられたので、ミサの中では今度は大司教様と補佐司教様とお二人のお名前が出て来て、お祈りいたします。司教様たちと共に、わたしたちが東京教区、日本のこの地において、神様から来るまことの、失われることのない喜びを保ち、そして他の人に伝えていく者となりますように、司教様のためにも、そして司教様を中心とするわたしたち教会のためにも導きを願いながら、このごミサをお捧げしましょう。